

第1章 戦場

軍隊の生活（特攻隊）② 特攻隊として生き残って

横山末雄さんのお話から

私は、昭和二年（一九二七年）、農家の八男坊として当時の白石村で生まれました。当時の白石小学校から、今の南高、札幌一中に昭和十六年に入学しました。

ところが、中学三年生になりましたらもう授業はできない状態でした。戦争が大変激しくなってきたからです。みんな兵隊に行つて、私たちも農家の手伝いに出かけて、田植えをしました。そうしていると、ある日、担任の先生から「お前は予科練を受けてみないか。」という話がありました。予科練というのは、当時、我々のあこがれでした。私はすぐに受験をしました。札幌での第一次学科試験に合格し、第二次は土浦の航空隊で実地試験を受けて、昭和十八年（一九四三年）十二月一日に晴れて海軍甲種飛行予科練習生、海軍飛行二等兵になりました。

予科練に行く時は、クラスメートと担任の先生が寄せ書きを書いてくださいました。今でも私の宝物です。どんな苦しい訓練があつても、これを夜に見て、仲間がこうやって励ましてくれたのだという心の支えになりました。

今のJR白石駅で村の人々に見送られ、昭和十八年十一月に出征し、予科練の訓練が始まりました。

○通信 長短二種の縦線を種々に配合して文字に代用する電信符号。

予科練習生が一番悩まされたのは通信です。「トツ」はイ、「トツトツ」は口、「ツートトト」はハというものです。だいたい一分間に六十字くらいしか打てませんけれども、聴くのですと、なれてくると一分間に百字くらいは聴き取れます。試験もあります。百字

○バツタ 戦時中のおし
おき。

の試験で、誤字が一つ出たらバツタです。海軍の制裁はバツタです。精神注入棒という棒があつて、お尻を出して、だーんとたたかれます。このため、通信で悩んで自殺する者も出たくらいです。

そこで一年何カ月かたって、昭和二十年（一九四五年）の春に、茨城県の百里ヶ原航空隊というところに行きました。毎日ここから特攻機が飛び立ちました。「帽を振れ。」と言つて、我々は帽子を脱いで振つて、特攻機を毎日のように見送つておりました。

○特攻隊 特別攻撃隊。
陸海軍の航空機・小艇による敵空母・艦船への体当たり戦法を行う攻撃部隊。

そんな五月のある日、総員整列がありました。分隊長から、「これから特攻隊員を募る。志願するものは一歩前へ。」と言われました。何のちゆうちよもなく、私は一歩前へ出ました。見たら、全員が前へ出ていました。分隊長は「諸君の気持ちは分かった、後日発表する。」と言つて、その場は解散しました。一週間くらいたってから特攻隊員が発表になりました。大方の者が特攻隊に選ばれました。みんな手を握つて、「おお、よかつたな。」と言つていました。私たちは、国のために死ぬのは当たり前なのだ、そして、愛する郷土を守るために、故郷を守るために死んでいくのだ、そういう気持ちでおりましたので、特攻隊への志願は何のためらいもなくし



当時のJR白石駅での見送り

イメージ図

特攻隊として生き残つて

○B29 第二次世界大戦末期に登場したアメリカ、ボーイング社製の大型長距離爆撃機。一万mの高高度を飛んだ。北海道以外の日本空襲にはほとんどこの飛行機が使われ、広島、長崎への原爆投下にも使われた。

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくった穴や地下室。

ました。そして、特攻隊が編成されました。原隊の土浦航空隊に戻りました。

そして、運命の日が来ました。昭和二十年六月十日、日曜日、空襲警報が鳴りました。いつもなら、空襲警報が鳴りB29が飛んできても爆弾一つ落としたことはないのに、その日は別でした。約二百九十機のB29と艦載機が、土浦の航空隊目がけて爆弾の投下と機銃掃射を始めました。至る所に爆弾が落とされ、平らなところが一カ所ありません。私はその当時、甲板練習生ということでみんなを引き連れて隊の外の防空壕に行きました。隊内にいた者はほとんど戦死しました。私は、たまたま防空壕の入口にいたので、砂をかぶった程度で大丈夫でした。

この爆撃で、約三百人近くの人が戦死し、隣の阿見町の町民の方も亡くなりました。その後、B29の空襲が来ました。みんな一生懸命になって逃げました。大変悲惨な戦死でした。もつと悲惨なのは、隊の外の防空壕に入っていた人たちです。その防空壕の真ん中に二発の爆弾が命中し、生き埋めになったのです。空襲が終わって晩の七時ころから、私はスコップを担いで作業員を連れ掘り出しに行きました。すると、みんなそこで座ったまま死んでいるのです。スコップで掘り出すわけにはいきません。



イメージ図

B29の空襲

おまけにそこは火山灰地で、掘れば掘るほど上から火山灰が落ちてくるのです。横の防空壕の板をたたくと中でたたき返す。「生きてるぞ。」と言うのですが、遅々として作業は進みませんでした。残念ながら、ほとんど全滅でした。そういう悲惨な戦いをしました。土浦が空襲されて訓練ができなくなりましたので、私たちは急遽、福井県と秋田県に分かれて移ることにしました。私たち予科練生は、秋田に移って、特攻訓練が始まりました。エンジンのない飛行機に乗り、爆弾を積んで、上陸用の敵艦艇に目がけて突っ込むという訓練です。したがって、グライダーの訓練から始まるのです。もう二度と帰らない、出発したらもうそれで終わりだという特攻隊です。六月から訓練が始まり、二カ月たった八月十五日、ラジオで戦争が終わったということを知りました。終戦になってからも三日間、私たちは「アメリカが上陸してくるか、竹やりでも突っ込むのだ。」「最後までおれたちは戦うのだ。」と言って、訓練をしていました。しかし、だんだんと落ちついてきて、やはり戦争が終わったのだ、隊は解散するのだということになりました。

昭和二十年八月二十八日に、解隊式と言いますが、みんなで敬礼しながら軍艦旗を降ろして燃やし、隊を解散して、そしてそれぞれ故郷に帰ることになりました。なかには足を引きずって帰っていく戦友がいました。非常に無残な状態です。

私は、二度と踏むことがないと思っていた白石の地に帰ってきました。戦争が終わったというよりも、帰ってきたという気持ちが強かったですね。白石に着いて、はあ、のどかだなと痛切に感じたことは今も忘れられません。

特攻隊として生き残って

DATA

平成23年度白石区平和事業

聴き取り

- ・平成23年1月18日
- ・北都中学校



横山末雄(よこやま・すえお)さん

- ・昭和2年(1927年)生まれ
- ・札幌市白石区在住